

岡山

風土と歴史を活かす町作り

長い歴史を通して、平和で文化的な国柄を保ってきた岡山。温暖な気候は豊かな農作物をもたらし、海の幸も豊富に穫れる風土。そして人々を支えてきた優れた教育と、世界に誇る伝統工芸。世界最古の土庶共学の学校、旧閑谷学校と、備前焼の歴史を通じ、この優雅で穏やかな土地の、根幹を支える精神をひもとく。

取材・文 木内昇 写真 谷山 實



三〇〇年の時を経た講堂が山々に抱かれるようにして悠然と建っている。しころぶきの備前焼瓦、鏡のような黒漆の床。ここではかつて多くの若者たちが居住まいを正し論語を朗誦していた。岡山県備前市閑谷にある特別史跡・旧閑谷学校。一文字型の洋池や、開け

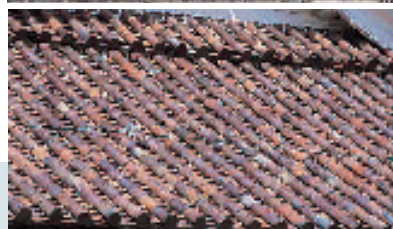
閉めのとき鶴の鳴くような音がする鶴鳴門、校地を取り巻くように巡らされた蒲鉾形の石堀と、ひとつひとつの造形の素晴らしさに目を見張る。この精緻で重厚な建築技術が、長年の風雪に堪え、ほとんど当時のままの姿をとどめているという事実にまず心打たれる。

変わらないのは、校内の自然の美しさも同様だ。春には桜や山ツツジが咲き乱れ、光政公の髪や爪などを納めてある椿山の塚では高

く伸びた椿の木が鮮やかな花をつける。秋には孔子像を祭つてある聖廟前にそびえる二本の楷の木が見事な紅葉を見せる。「あそこはいつ行っても気持ちがいいよ」。地元の人々は憩いの場として閑谷学校に親しんでいるのだ。

開校は寛永十（一六七〇）年。時の藩主・池田光政が広く教育を施すため創設を命じ、学校奉行・津田永忠の手が三〇年という歳月をかけ完成させた。江戸時代、藩校を設立するのは諸藩ともに習いであつたが、光政は特に学問熱が高く、郡内に手習所を二二三カ所に加え岡山藩校を作り、全国で三本指に入る学校数を誇った。さらにこの閑谷学校では、世界最古といわれる土庶共学を実施。士分は藩校で、庶民は私塾や寺子屋で学

校門前に横たわる左右の長さ100mほどの洋池。大正時代に埋め立てられ、近年発掘復元された（右上）。見事な蒲鉾形に整えられた石堀。硬貨を差し込むこともできないほど石と石がピッタリと合わさっている（左上）。校地を流れる溪流の上流には茶室として使われていた黄葉亭がある。茅葺き屋根の寄棟造り、屋根のいただきには備前焼の伏鉢が（左下）。



鶴鳴門と呼ばれる校門は、屋根は切り妻造り、入り口の左右には花頭窓をあしらった中国風のデザイン（左上）。創設時、伊部の陶工を閑谷に集めて焼かした一〇万枚近い備前焼の瓦は昭和三十四年から三十七年にかけて葺き替えられた（左下）。雨漏りを防ぐため屋根の内側に排水用のパイプを通すなど、最高峰の建築技術によって建てられた講堂。左手には藩主臨学のときの座所が（下）。





孔子廟で毎年10月に行われる「釈菜」は、儒学の祖である孔子を祭る儀式。岡山県立和気閑谷高等学校の先生たちによって行われる（右上）（写真提供：（財）特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会）。講堂に掲げられた池田綱政による「定」の壁書（左上）。孔子廟外観。入母屋造りの本殿にあたる大成殿（下）。



講堂隣にある飲室は、師匠や生徒たちの休憩の場。中央にある炉には「炭以外の薪を燃やすことを禁止」という内容の文字が彫られ、そのため天井には煤の汚れがない（右上）。堂々とした10本のケヤキの柱と鏡のように磨き込まれた拭き漆の床が美しい講堂内部。中に上がる場合は新品の靴下着用。保存保持には気を配りながら実用的に使用（上）。生徒たちが正座をして論語を読み上げる講堂学習。約30分ほどの授業だ（右）。



確かに、吉田松陰の松下村塾や緒方洪庵の適塾といった私塾から

物が出てないんですね」

「だからでしょうか、目立った人物が出てないんですね」

と、閑谷学校所長の渡辺光右さん。初期には政事を主軸にした陽明学を唱えた蕃山を擁した光政もその後「純粹朱説を守る」のを基本として、儒教による道徳的な思想の普及につとめた。「国造りは人作り」という理念のもと、治世をする人材を育てるためだった。これは二〇〇

年、閑谷学校所長の渡辺光右さん。初期には政事を主軸にした陽明学を唱えた蕃山を擁した光政もその後「純粹朱説を守る」のを基本として、儒教による道徳的な思想の普及につとめた。「国造りは人作り」という理念のもと、治世をする人材を育てるためだった。これは二〇〇



岡山県青少年教育センター閑谷学校所長の渡辺光右さん。

名だたる志士が生まれたような事実は、この学校の歴史にはない。

一〇〇〇年前から伝わる技術を今と融合させながら

歴史あるものを大切に守る指向が強いのは、この土地の特質かもしれない。日本六古窯のひとつ備

名だたる志士が生まれたような事実は、この学校の歴史にはない。一〇〇〇年前から伝わる技術を今と融合させながら

現在も教育県として名高い岡山では、その大本である閑谷学校を教育の場として活用している。敷地内にある岡山県青少年教育センターでは、県内外から学生等が訪れ、体験学習や研修を行っており、講堂で論語を読む「講堂学習」を年間約九〇〇〇人の研修生が体験している。また、（財）特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会や岡山県立和気閑谷高等学校とともに江戸時代

名だたる志士が生まれたような事実は、この学校の歴史にはない。一〇〇〇年前から伝わる技術を今と融合させながら

前焼も、伊部という町で一〇〇〇年以上の長い時を刻んできた。方々の煙突から煙が上る光景の中にある新緑がまばゆい里山の中腹には、人間国宝の伊勢崎淳先生の窯がある。一般的な登窯ではなく平安時代から江戸の天保期まで用いられていた半地下式穴窯は、先生の手で再現されたものだ。

「作り方や形状の詳細な史料はもちろんないけれど、昔の穴窯の焼け跡が見つかって、その破片のメッセージでだいたいのことはわかるからね。火がどう動いたか、どんな形だったか。山の斜面を利用して作って、たぶんほとんど当時のままにできていると思いますよ」

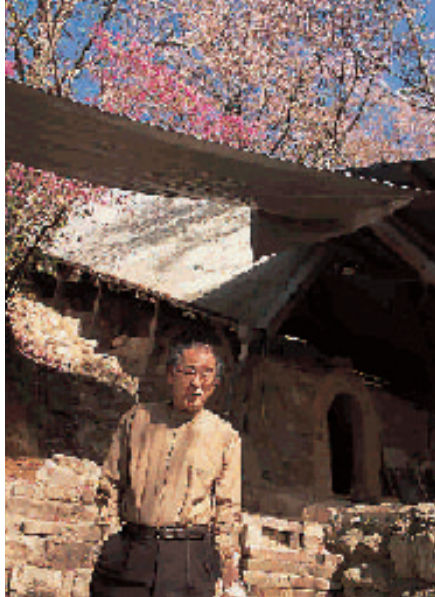
歴史を継ぐことの奇跡的な交感に震撼せずにはいられない。同じ技術を極めた者同士だから、言葉がなくても時を隔てても響き合えるのだろう。

備前焼は、平安末に登場した須恵器に由来する。焼きしめて青みがかった色を出す須恵器の手法から、土に多分に含まれた鉄分を酸化させて渋みのある色を出す備前焼の技法に移ったのが鎌倉時代。当時の陶工は主に、すり鉢と壺と甕の三種類を中心とした日用雑器を作っており、室町時代になると

前焼も、伊部という町で一〇〇〇年以上の長い時を刻んできた。方々の煙突から煙が上る光景の中にある新緑がまばゆい里山の中腹には、人間国宝の伊勢崎淳先生の窯がある。一般的な登窯ではなく平安時代から江戸の天保期まで用いられていた半地下式穴窯は、先生の手で再現されたものだ。

「作り方や形状の詳細な史料はもちろんないけれど、昔の穴窯の焼け跡が見つかって、その破片のメッセージでだいたいのことはわかるからね。火がどう動いたか、どんな形だったか。山の斜面を利用して作って、たぶんほとんど当時のままにできていると思いますよ」

先生の作品はいずれも伝統工芸の技を集約しながら、現代的な斬新さと、時代性を超越した敢然たる強さや美しさがある（右）。人間国宝でありながら、気さくなお人柄の伊勢崎淳先生。「たまたまそんな冠がついただけで、僕は普通の人間じゃからね」。創作に講演に展覧会にと忙しい毎日だ（下）。



伊部の町では、至る所で窯の煙突が見られる（右上）。昭和36年に備前では初めて100年ぶりに復元された伊勢崎先生の半地下式穴窯（右）。山桜や山ツツジに彩られたのどかな里山が先生の仕事場だ（上）。



それが全国に出荷され一大産業となった。さらに室町後期にはお茶の文化からわびさびという美意識が生まれ、備前焼の素朴な味わいはまさにそれに適ったものとして重宝された。今なお、日本特有の美を伝える焼き物として多くの人々を魅了している。

もちろん長い歴史の中には斜陽の時期もあった。江戸後期から明治期には輸入品の陶磁器に注目をさらわれ、時代遅れのらく印を押された。また食糧難の戦後は、二〇世帯にまで職人が減った。

「僕が始めたのはまさにその戦後。焼き物は初期投資が大変で、土地を買い、窯を作り、仕事場を作り、それから焼き物を焼く。売れてはじめて生活ができる。だから食料さえ乏しい時代に、なり手なんかない。僕もヘラ一本もらって独立したから大変でしたよ」

このまま底辺を広げなければ備前焼は衰退する。そう感じた先生は、弟子入り志望の人を厭わず受け入れた。その後、時代は高度成長期に突入、産業も栄え、お茶やお花を愛しむ人が増え、器に注目が集まりはじめた。備前焼は活気を取り戻し、今では伊部周辺に四〇〇人近い陶工が暮らしている。

伝統工芸がアート作品として世界の注目を浴びる

備前焼には様々な手法がある。松の割り木の灰が素地に降りかかってできる「胡麻」、半溶け状態の灰が細やかな凹凸を生み出す「灰かぶり」、稲わらを巻いて焼くことでわらの跡が緋色の筋となる「緋櫛」など。絵付けではなく火が作る文様のため、作為を介せない部分が多いのではと思いきや、これは素人の浅知恵。

「長年の経験と実績で細かい模様まで、窯入れの段階で八割方仕上がりがわかる。もちろん偶然性はある、だからこそ面白いんじゃないけど、火に素直に、窯に素直に、土に素直に接すれば思ったように焼き上がるんじゃない。素材と真剣に向きあっていると、土が『こういう形にしてくれ』と語りかけてくるのが聞こえるよ」

先生の作る芸術性と独創性の抜kindで備前焼は、アート作品として海外でも高い評価を受けている。つい先日、ボストン美術館とハーバード大学後援の個展をアメリカで開いたばかり。イサム・ノグチや池田満寿夫といった世界的な作家とも親交が深かった。穏

やかで気さくなお人柄からは想像もつかないが、その作品には厳然とした強さや悠久の時の流れにも似た大きさがある。いくら見ても飽くことのない斬新なデザインには、真理を導き出すような深みがある。中央に緋櫛をあしらった備前皿、黒々とした光沢が美しい角壺、そして一際目を奪われるのが「完全黒体」と題された作品だ。細かな金粒が焼き付いた黒い円からは、薄暗い感情の漂流が生々しく伝わってくる。

「これは黒い太陽なんじゃ。以前網膜剥離になって、三カ月入院して、暗闇にジーンと寝ていたときイメージしたものを目に見える形に置き換えたんじゃない」

作るといことは生きるということと一緒だ、と先生は言う。生きるということは感じることで、それを形にすることが創作なのだ。

「もの作りの世界は、自分で見つけていくしかないんじゃない。技術的なことは教えてもらっても、作品は自分の感性で創るしかない。だから常に作り続けていないと道も見えない」

その道を確立し



生徒たちが襟を正してぐくった石門。4mほどあったが今は大半が埋没している（右）。学校全景（左）。



閑谷学校の鶴鳴門の上にあしらわれたシャチホコ。これも中国風（右）。藩主池田家の家紋である蝶を入れた閑谷神社の紋瓦。建物ごとに紋瓦は異なる（中）。孔子廟の床には亀甲形の備前焼瓦（がせん）が敷かれている（左）。

たからこそこれほどの作品を生み出せるのだろう。そう訊くと、先生は笑いながら首を振った。

「こういう道だ、というのがあれば教えて欲しいくらいじゃ。高村光太郎が『道程』で『僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る』と言うとるけど、まさにそれ。探し求めて歩いているときは、迷ってばかりなんよ。でも振り返ってみたらなんとなく自分の道が残っている。そういうことじゃね」

身近にある素材の魅力を 創意工夫で最大限に引き出す

伊勢崎先生から興味深い話を聞いた。世界的な陶器となった備前焼の原料である伊部周辺の土は実は焼き物にはさほど適していない、ということ。不純物が多く、熱にも弱い。しかし地元の人々は、よりなかつた先人たちは、長時間でゆっくり温度を上げていって焼くという技術を見出した。欠点を創意工夫と探求心で補う過程が、結果的に他にはない風合いを生み出すことになったのだ。

「昔の人は、ものに対する取り組み方が非常に優れていたんじゃない。この土を生かそうと必死で考えて身体で覚えてきた人々の努力

があつて、独特なものができる。はじめから適した素材を選べばきれいなものはできるかもしれない。でも美しいものはできない。『きれい』と『美しい』は違うんよ」

ボーダーレスの時代と言われて久しい現代。価値観も均一化し、速度は早まり、利便性も高まった。最適な材料を世界中からいつでも探し出し、取り寄せることなど難なくできる。でもそれによって、「どこかで見たような」ものが多くなっているのも事実だ。それらはきれいに整ってはいるけれど、見る者の心を揺るがすような力を持たない。幕藩時代、工夫と発想で身近な環境を最大限に活かして、自力で循環社会を作っていた日本は、今、気候も違えば地形も民族性も違うはずの外に歩調を合わせることに腐心するあまり、この国が元来持っていた独自の風土で平らにならしてしまっているように見える。

閑谷学校を設立した池田光政は、未来永劫残る学校という願いを持っていた。命を受けた津田永忠は、国替えなどによって取りつづかれることがないよう、学校の畑、学校の山林を定め、そこであがった収益をもとに学校運営をする学田

学田という手法で財政基盤を確保した。彼らがそこまでして教育を貫きたかつたのはきっと、中央進出のためでも領土拡大のためでもなく、藩の礎を強くし、豊かな風土を守るためではなかったか。この地に住む人々の美しい暮らしを絶やさぬためではなかったか。

伊勢崎先生は言う。

「多くの窯は途中で失われていった。その中で備前焼が千年間絶えることなく続いてきたのは、地元の陶工集団が、素朴な技法を守りながら革新的な精神を持っていたからだと思ふ。時代が変われば生活空間も、人間の感性も変わる。だからその時代に生きたものを作るのが大事なんや。でも変えないで守るべきものもある。芭蕉がいう『不易流行』じゃね。伝統というのは伝承と違う。変革の歴史が伝統になるんじゃ。だから僕も備前焼の長い歴史の中で、次の歴史の最新の一步を踏み出すようなものを作りたい。善し悪しは今の人の判断だけではなく、歴史が判断するものだと思うんじゃ」

守るべきものと変わるべきもの。そのバランスが問われる時が今、すべての分野でできているように思う。誰しも、長く続く歴史の



一端を担っている。今だけの尺度で事を行い、一概に世界に同調するだけでなく、自分たちが積み重ねてきたものや揺るがせない価値観を知ってこそ、先まで見据えた方向性を定められるのではないだろうか。軸がなければ、バランスを失う。私たちの足下には、世界に誇るべき豊潤な文化や道徳や伝統がすでにあるのだ。

岡山の人々は、ここに暮らしてきた人々が一步一步道を模索してきた「道程」を大切に守り、引き継いでいる。だからこそ穏やかで深みのあるこの土地ならではの風が、光彩を放って在るのだろう。